

猫の啓蒙 ——モンクリフ『猫』における猫愛好の擁護と顕揚——

貝原 伴寛

はじめに

猫は現在、愛玩動物として数多く飼育されているが、西洋において猫をペットとして扱う態度が顕著になったのは、比較的最近のことに過ぎない。中世期にヨーロッパで飼育され始めた猫は、鼠害対策の役畜として重宝されながらも、同時に害をもたらす動物と見なされ、根強い忌避の対象であり続けた。悪魔的な恐ろしい動物としての猫という表象が、美的ないし情緒的楽しみのためのペットという像に取って代わられる転換が始まったのは、18世紀のことだと示唆されてきた¹。しかしこの過程については、史料に則した研究の不足から、仮説的で漠然とした見通し以上のものは得られていない。現代人の生活において猫が占める重要性を考えれば、これは人と動物の関係史一般にとっても無視できない欠落である²。

18世紀以後のヨーロッパにおいて、猫はいかにしてペットになったのか。この問いに取り組むための格好の手がかりとなる史料が、1727年にパリで刊行された著作『猫』である³。フランスの文人パラディ・ド・モンクリフ（François-Augustin Paradis de Moncrif, 1687–1770）が著した同書は、猫を主題的に論じた史上初の本であり、猫愛好家の間では一定の知名度がある。19世紀の批評家シャンフルリ以来、猫好きを自任する作家たちによって、モンクリフは、猫を悪魔的動物と見なす「偏見」が横行する時代に、敢えて猫を擁護した先覚者と見なされてきた⁴。音楽史的な観点からは、レーベンシュテインとベルシュトルドが、同書を文化相対主義の先駆けとして評価している⁵。

こうしてモンクリフの主張の斬新さは既に強調されてきたが、次に浮かんでくるのは、この『猫』という本が、どのような時代状況のもとで生まれたのか、何がその成立を可能にしたのか、という問いである。この問題への部分的な答えは、ボビスとロジャースがそれぞれに著した猫の文化史から得られる。すなわち、モンクリフはパリ社交界の女性の間で流行した猫愛玩に刺激されて同書を執筆したのだという⁶。しかし以下で示すように、社交界の流行への対応というのは『猫』という書物の一側面に過ぎない。本稿は、既存の研究成果を重んじながら、不足していた文脈を補いつつ、詳しいテキスト分析を行うことで、『猫』をより精密に同時代の社会のなかに置きなおすことを狙うものである。

モンクリフによる史上初の猫擁護論を、人と猫の関係史のなかに位置づけるためには、貴族の猫愛玩だけではなく、当時の文芸と学問の文脈、さらにジェンダー的規範も考慮したうえで、モンクリフが著者として用いた戦略を読み解き、さらに同時代における同書の受容を具体的に調べる必要がある。本稿ではその手始めとして、モンクリフがどのような文脈のなかで、いかなる戦略をもって、猫に対する「偏見」の批判という前例のない企てに取り組んだのかを分析する。この作業を通して、18世紀前半のフランスにおいて、人と猫の関係性が置かれていた歴史的局面を知るための一助としたい。

以下ではまず著者の伝記的情報を簡潔にまとめ、同時代にあったという猫に対する「偏見」の内実を、モンクリフの言葉を他の史料と突き合わせながら概観する。次いでモンクリフの戦略を、同時代の学問的言説との関わり、学問と遊戯的文芸の組み合わせ、実在人物の権威の借用、そして猫のイメージの塗り替えという四点から分析していく。この作業によって、先行研究が見落としてきた文脈が回復され、『猫』というテキストと同時代の社会の関係性が、より詳しく理解されるだろう。

1. 「偏見」を笑う

パラディ・ド・モンクリフは18世紀の文人の中でも稀有な社会的栄達を遂げた人物で、政治的には『百科全書』派から距離を置いたものの、キャリアの上では、ロバート・ダーントンがいう「高尚啓蒙」に属する典型的な文士である⁷。1687年にパリの官吏の家庭に生まれ、父親が破産して失意のうちに没してから、スコットランド系の母親に兄とともに育てられ、まもなくパリの社交界で台頭した。オペラの台本を書きつつ、有力者ダルジャンソン伯爵らの庇護を得て宮廷に進出し、『猫』出版後の1733年にはアカデミー・フランセーズ会員に選出された。昨今の文化史で注目される社交術本などの著述を続けながら宮廷に地歩を固め、1743年にはダルジャンソン伯の推挙で郵便書記長に、ついで1744年には王妃マリ・レクザンスカの朗読係という新設の役職に就任し、ときに書籍の検閲にも従事した⁸。以後1770年に死去するまで高給官職を保有する宮廷人として長らえた。『猫』は社交界で活躍しながら未だ官職を持たないころ、40歳に近づきつつあったモンクリフが、猫好きの貴婦人の提案に応えるかたちで執筆した著作である。

1727年にパリのキロー社から出版された『猫』は、八つ折り版で200頁ほどの小著である。貴婦人に宛てた11通の書簡に、猫に関する詩を数点再録した付録を加えた体裁をとる。猫にまつわる習俗と文芸を論じることを趣旨とし、当時のパリの社交界に見られた猫愛好の様子に加えて、古代エジプトの猫神信仰と、イスラム教徒の猫の扱いを詳しく紹介する。全体を通じて

筆致は軽妙であり、モンクリフ自身が後に述べた言葉を借りれば、「真剣にふざけた (gravement frivoles)」調子で学問をパロディする、遊戯的性格が強い⁹。

それでもなお、本書が同時代のフランスに蔓延していた猫に対する「偏見」に抗して書かれたことは明確である。「偏見」(préjugé, prévention)の語は本文中に繰り返し登場するが、この語が指し示すのは、猫を悪しき動物と見なす認識、ならびに猫を恐れる心である。

冒頭でモンクリフは、ある会合で猫の話題になり、皆が敵対的な意見を述べるなか、そうした意見が無根拠であると指摘しようとしたところ、まさに一匹の猫が現れ、論敵の一人が「機転を利かせて気絶した」せいで、それ見たことか、やはり猫は悪いやつではないか、と総批判を浴びる羽目になったという(2頁)。猫を見て気絶するほどの恐怖心など現代では想像しがたいが、近世においては珍しくなかったらしい¹⁰。16世紀チューリヒの博物誌家ゲスナーには、鳴き声を聞いただけで発汗し震えあがるほど猫を恐れた知人がいたという。モンクリフの時代にも猫を恐れる者はいたようで、サン＝シモンらの伝えるところでは、フランス王国軍の要人であったノアイユ公爵も同様に猫を恐れ、猫好きだった幼君ルイ15世に度々からかわれていたという。史料に残る例は数えるほどだが、猫を恐れる態度はそれなりに見受けられたのだと推察される。

中世において、猫が魔術的な力で人に害を加えるという俗信があったことは、ボビスが詳述するとおりである¹¹。モンクリフが語るように、この観念は18世紀にも残存した(7頁)。ただし猫への恐怖を、魔術信仰だけに還元するのはミスリーディングである。というのも、近世において猫は鼠を狩る役畜ただただでなく、しばしば人間の食糧を奪い取る害獣でもあり、また捕殺して毛皮を得るべき資源動物でもあった。大半の猫は、人間とは不信と暴力に満ちた関係にあり、しばしば獐犷に振舞ったはずだからである¹²。

市井の人々と暴力の応酬を繰り返した多くの野良猫のことを思えば、猫嫌いは単に無根拠な「偏見」とは言えないはずである。しかしモンクリフはこの側面を度外視して、猫への恐怖心を非理性的なものとして規定する。その頼りとなるのが、18世紀初頭に権威を発揮した二人の哲学者である。モンクリフはまずマルブランシュ『真理の探究』の一節を引用して、猫を恐れる心は、妊娠中の母親が猫を見て覚えた恐怖が胎内の子供に伝達されたものであり、「母親の無秩序な想像力」の産物に他ならないと切り捨てる。次いでロックの『人間知性論』を引用し、猫への恐怖心は、「乳母の物語」が子供の精神に植えつける、「我々の知性にとって恥ずべき、観念の無秩序な連合に過ぎない」という(5頁)。要するに猫を恐れる心は、理性の働きとは無縁の、幼稚で愚かな偏見なのだという。ここでモンクリフは、個人的な親交があった哲学者フォントネルの名前を挙げ、幼少期に乳母から聞かされた「猫に対する誤った偏見」を捨て、「猫を

かわいがる (chérir)」ようになることが、「フォントネル氏にとって哲学の道の第一歩」となった、と付け加えている (7 頁)。

モンクリフは第 1 信で以上の基本的立場を示したうえで、引き続き所々で猫嫌いを批判している。なかでも第 9 信の長い脚注では、夏至の聖ヨハネ祭において猫を焼き殺すメス市の習慣を「精神の恥辱」と呼び¹³、猫が喋ったと思い込んで恐れをなした数学者に対しても「知性にとって恥ずべき恐怖心」と厳しい言葉を向けている (120-121 頁脚注)。ここで注意したいのは、聖ヨハネ祭の批判において、やがて 18 世紀後半に一般化することになる「野蛮」(barbare)、「残酷」(cruel)、「非人間的」(inhumain)といった語が現れないことである¹⁴。動物虐待が道德問題として認知される以前の時代にあって、モンクリフの猫擁護論は、虐げられた猫への同情を誘うという形ではなく、「幼少期の偏見の虜」(141 頁)となるのは恥ずかしい、という羞恥心に訴えかける形式をとった。

こうして迷信を突き、理性を説く『猫』は、楽観をもって締めくくられる。「奥様、案ずることはありません。猫の良さ (mérite) が広く知られる日がいつか来るはずです。我々ほどに開明的な (éclairée) 国民のもとで、この問題に関する偏見が、これほど正しい意見 (un sentiment aussi raisonnable) に依然として長いあいだ勝り続けることなど、ありえません。」たとえ「理性の進歩」が「偏見の産物を破壊する」のに長い時間がかかるとしても、その歩みは確実だという (154-155 頁)。こうして『猫』は、18 世紀啓蒙に特徴的な、進歩的理性への信頼に満ちた歴史観に行きつく¹⁵。ではこの「猫啓蒙」とも言うべきプロセスを助けるために、モンクリフの著作はどう貢献するのか。彼はロックとマルブランシュの哲学を振りかざすことに満足せず、ヨーロッパの外に目を向ける。

2. 猫の習俗論

モンクリフの著書は、古代エジプト宗教とイスラム教における猫の扱いを論じた文化史としての側面を持っている。なかでも古代エジプトにおいて猫が音楽と関連付けられていたことを、ヨーロッパにおいて猫がむしろ騒音の象徴とされていることと対比し、何が音楽を構成するかという認識自体が社会によって一様ではないのだ、と論じた箇所は、文化相対主義的な考えとして音楽史家の注目を集めてきた¹⁶。しかし、このような異文化への眼差しが、当時の習俗研究の潮流に与したものであることは見逃されてきた。

17 世紀における東洋学の発展を受けた 18 世紀初頭には、古今の宗教や習俗に関する豊かな研究が数多く出版された¹⁷。モンクリフの『猫』の出版に先立つ十年だけでも、初の比較宗教学研究と評されるベルナールとピカール『世界宗教儀式』(1723-1737 年)、考古学の先駆とさ

れるモンフォーコン『古代図説』とその補遺 (1719, 1724 年)、アメリカ民族誌の礎と呼ばれるラフィット『アメリカ未開人習俗と古代習俗の比較』(1724 年) など、とりわけ重要な研究書の出版が相次いだ。18 世紀中葉より顕著になるような、ヨーロッパを文明の地と見なし、東方のイスラム教諸国よりも上位に位置づける階層的な見解は未だ支配的ではなく、いずれも文献学的方法を重んじ、しばしば文化相対主義的な論調を示した。なかでも『世界宗教儀式』は、キリスト教ないしヨーロッパを上位と見なす予断に走らず、諸宗教を同列に比較し、時には「異教」の美点を率直に認める姿勢を示す。また異国の複雑な宗教実践を描写するために、豊富な図版を視覚資料として用いる方法が、この頃から一般化した。文芸においても、この時期にガランの『千夜一夜物語』仏訳版 (1704-1717 年) が東洋趣味に火をつけ、モンテスキューの『ペルシア人の手紙』(1721 年) が現れている。

モンクリフの猫論は、こうした世界宗教論や東洋学の研究潮流に参加したものである。軽妙な筆致とは裏腹に、『猫』には二段組の脚注が数多く付されており、古代エジプト論においてはプルタルコスやヘロドトスなど古代人の著作が、イスラム圏に関してはオスマン帝国への旅行記が複数引用されている。仏訳の存在しない古代文献はラテン語、ときにギリシア語でそのまま引用されているが、これは高貴な女性に宛てた書簡という体裁とは矛盾する。というのも、貴族であっても大多数の女性は古典語の教育を受けられず、その読解能力は男性に限られたからである。猫にまつわる習俗を論じるにあたって、モンクリフが詳しい文献調査をしたことは明らかで、同時代の学術書に親しんでいたことも、モンフォーコンの『古代図説』を引用していることから伺える。エジプト宗教に関する図版 5 点は、モンフォーコンの書物から模写複製されたものである (図 1)。挿絵の印刷を担ったケリュス (Anne Claude Philippe de Caylus, 1692-1765) は、裕福な貴族でありながら、骨董品の蒐集に加えて版画制作にも携わり、考古学上の業績が認められて 1742 年には碑文文芸アカデミー会員にもなった学者である¹⁸。おそらくモンクリフは、ケリュスの協力によって研究書へのアクセスを得たのだろう。

典拠を示す学問的手続きを踏まえて、モンクリフは古代エジプトの猫神崇拝を紹介し、いくつかの解釈を示した。簡単に要約すれば以下のとおりである。楽器シストラムは猫神と関連付けられたが、それはヨーロッパ人には雑音にしか聞こえない猫の声で、エジプト人にとっては音楽性と結びついていたことを示す (12-20 頁)。猫神が頭部を除き人間の身体を有するのは、崇拝対象に自らの特徴を投影してしまう「人間の虚栄心」のわざである。また祭司が崇拝対象の動物を模倣するなどエジプト宗教は「突飛 (extravagante)」な性格を有した (23-31 頁)。古代エジプトで猫は「高位 (prééminence)」にあり、死ねば丁重に弔われ、喪に服されるなど「名誉ある扱い」を受けていた (31-40 頁)。偶像崇拝に対する一定の距離を保ちつつ、「エジプト人の

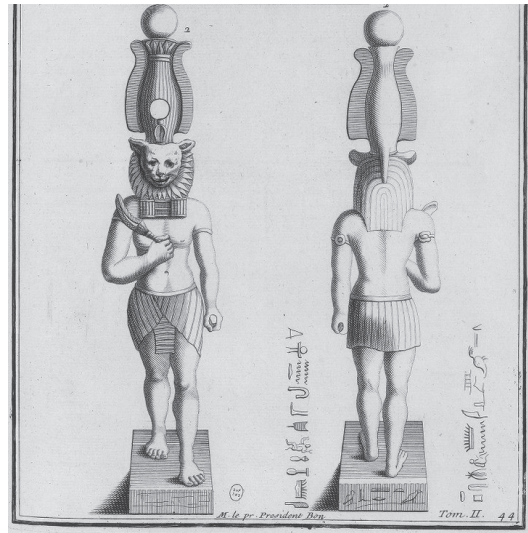


図1 猫神像（フランス国立図書館所蔵）

左：Moncrif, *Les Chats*, Paris, Quillau, 1727, p. 25.

右：Montfaucon, *Supplément au livre de l'Antiquité*, Paris, Delaune, 1724, tome 2, planche 44.

猫愛」(39 頁)を詳しく紹介する内容である。

つづいて第5 信では「アジア」に議論が及ぶ。コンスタンティノーブルほか各所に存在した猫飼養施設に端的に見られる、「トルコ人」が猫に示す歓待と世話の様子を、トゥルヌフォルの旅行記に基づいて紹介する(60–62 頁)。こうした「アジア人」の猫に対する優しさの起源としてモンクリフは、ムハンマドが猫を重んじたという伝承を挙げる。預言者の側近の一人がアブー・フライラ(猫の父)と綽名されたことについては、当時のアラブ人がそもそも猫を好んだから、権威ある宗教指導者にこのような異名がつけられ得たのだ、との推測を示す(63–64 頁)。続いてバラモン教を論じ、猫が古来バラモンと肩を並べる「高名(haute réputation)」を有すると述べ、その根拠としてパトリパタンという名の猫が登場する説話が掲載されている。管見の限り他に典拠がない奇妙な小話だが、情報提供者として碑文文芸アカデミー会員のフレレ(Nicolas Fréret, 1688–1749)が実名で示されていることから察するに、モンクリフの創作ではないらしい。

注意すべきことに、エジプト論においてもアジア論においても、猫に好意的な東洋の習俗に対して、前節でみたような迷信批判の矛は差し向けられない。偶像崇拜一般を揶揄することこそあれ、猫に対するエジプト人と「アジア人」の眼差し自体は、常に好意的に論じられている。

以上のように、独自の研究に基づいて古代と東洋の習俗を論じる箇所は、論文としての性格を有するものだった。とりわけエジプト論は学者の興味を惹いたらしく、グロ・ド・ボーズ (Claude Gros de Boze, 1680–1753) がビニョン (Jean-Paul Bignon, 1662–1743) の要請に応じてモンクリフ説を論評した書簡がフランス国立図書館にのこっている¹⁹。ボーズもビニョンも、碑文文芸アカデミーほか複数のアカデミーに席を占めた有力な学者である。またビニョンの影響下の学術誌『ジュルナル・デ・サヴァン』は、「猫好きが過ぎるご婦人方」のための書物であると断りながら、詳しい紹介を行った²⁰。この記事によって、『猫』は学問の書として公的に認められたといえる。

3. 学識と遊戯

ところが『猫』は単なる学術書ではなかった。これは挿絵を見るだけでも明らかで、先に示した考古学的な図像と同列にパロディ的な図版が並べられており、中には後述の猫悲劇の場面を描いた、猫が着飾って屋根の上で踊っている絵もある (図2)。

モンクリフが学問と非学問を一緒くたにしていることについて、グロ・ド・ボーズは手紙の冒頭でこう述べている。「『猫』と題された書に関する私の意見を、閣下が本当に真剣に (bien sérieusement) お求めだとは、どうも思えません。」王立図書館長ビニョンは前日、新刊の『猫』



図2 デズリエール嬢『コシヨンの死』を描いた図 (フランス国立図書館所蔵)

Moncrif, *Les Chats*, Paris, Quillau, 1727, p. 117.

が提出された際、エジプトの猫神の図版をチラと見てすぐにポーズに見解をまとめるよう依頼したのだという。しかし「今日にはもうお読みになって、あるいは少なくとも軽く目を通されて、もう私の意見は不要とお考えのはず。」なぜなら、「著者は自分の論題について嬉々としてお喋りに興じるばかり (charmé de Badiner avec son sujet) で、研究を深めて追究しつくす決意を全く欠いている」のだから。「そもそも、あるご婦人に宛てられたものである以上、勉強になるというより退屈なだけの細かい学識は避けた方がよかったはずだ、と閣下もお考えになったに違いありません²¹。」つまりビニョンは一部の版画を見て学術書と思い込みポーズに書評を依頼したが、ポーズとしては、『猫』は女性向けの著作であって、研究書としては不十分だと考えた。同時に女性向けの著作としては「退屈」な学問に満ちており、総じて中途半端な本だというわけである。

モンクリフはなぜ、このような中途半端な形式を選んだのだろうか。この選択を理解するには、そもそも「猫」という主題が学芸において占めていた位置を知る必要がある。

まず学問における猫の位置を見ておこう。ルネサンス期には博物学者のゲスナーやアルドロヴァンディらが詳細な猫論を著した²²。しかしゲスナーのいう「周知の動物」たる猫に敢えて紙幅を割くことは、動物種を網羅的に論じる百科全書的なアプローチによってようやく正当化されたことであり、猫だけが単体で論じられることはなく、大多数の学者からは、猫は特段の議論に値しない動物として等閑視された。これは浩瀚な論文の対象となりえた犬との大きな違いである²³。プリュシュのベストセラー『自然の光景』(1732-1742年)は猫への無関心を端的に示すものである。伯爵夫妻と友人たちの会話という親しみやすい形式で自然誌を語る同書で、猫について関心を示すのは夫人だけであり、数行を経たのちに男性たちのロバ談義によって遮られてしまう²⁴。猫への関心は女性化され、些事化された。このような時代に、男性の学者を相手に猫だけを殊更に取り上げて詳しく論じることは、難しかったはずである。

文芸において猫が主題化される場面は二つある。ひとつが『イリアス』のパロディ『蛙鼠合戦』に遡るビュルレスクの伝統で、猫は喜劇的な要素として登場する。ラブレー『第四の書』(1552年)第67章、セルバンテス『ドン・キホーテ』第2部(1615年)第46章、ロペ・デ・ベガ『ガトマキア』(1634年)がこの系譜に属する主要な猫の表象である。ダーントンが論じた「猫の大虐殺」と同じで、ビュルレスクにおいては騒音に満ちた暴力と笑いが結びつき、猫に対する愛情の余地は無い²⁵。

これと対照的に抒情性を有したのが墓碑銘 (épitaphe) である²⁶。愛人が飼っていたスズメまたはオウムの死についてそれぞれ吟じたカトゥッルスとオウィディウスの詩を典型とし、模倣はルネサンス以来数多い。君主や貴族に献呈されたほか、友人や自らの死んだペットを詠うも

のもあるが、話題となるのは基本的に鳥か犬であった。例外的に詩人が愛猫の死を悼んだ詩として、デュ・ベレの抒情性に富む中編詩（1558年の詩集に収録）ならびにメナール（François Maynard, 1582–1646）の短い墓碑銘（1646年作品集に収録）があり、双方ともにモンクリフの著作に再録されている。ただしゲスナー流の博物誌に似て、両者ともに詩集の数頁を占める部分に過ぎず、単体で出版されたわけではないことに注意したい²⁷。要するに、男が猫について文芸を出版する場合は、滑稽文学とするか、あるいは墓碑銘を詩集の一部として収録するという形式に限られていたのである。

17世紀末になると、そもそも猫に関する文芸自体が女性化されていく。サロンの社交生活が発展したこの時代には、「典雅（galant）」と呼ばれた新たな文芸様式が生まれた²⁸。スキュデリ嬢に代表される女性作家が数多く参画した典雅文学においては、動物が頻繁に主題化され、ペットの名前を借りて動物同士に詩のやり取りをさせるという遊戯的な詩作も行われた²⁹。典雅文学の主要な担い手のひとりデズリエール夫人（Antoinette Deshoulières, 1638–1694）によって、夫人のメス猫グリゼットが近隣のオス猫たちと交わしたという体裁の一連の書簡が『メルキュール・ギャラン』誌上に掲載された³⁰。「猫書簡」は夫人の死後、作品集に収録されて版を重ねた。娘のデズリエール嬢（Antoinette-Thérèse Deshoulières, 1659–1718）もまた、デズリエール家の猫がそろって登場するパロディ悲劇を著し、1724年版からはこれも母の作品集に収録されている。これらは基本的に男女の恋愛の機微を語る典雅文学をモデルに、猫に愛を語らせる詩であるが、中にはデズリエール夫人自らがグリゼットに思わず覚える強い愛着を率直に吐露する詩句もある。デズリエール母子が活躍した17世紀末以来、猫は女性性との結びつきを強めていった。墓碑銘においても、デュ・ベレ式に男性が自らの愛猫に捧げた詩は、少なくとも出版物においてはもはや見られなくなり、もっぱら貴族女性に男性詩人が詩を捧げるという形式が支配的になった。モンクリフはデズリエール母子の全ての猫詩に加えて、当時の墓碑銘も二点再録しているが、いずれも男性が貴婦人に宛てたものである³¹（89, 106–107頁）。両性参加の典雅文学は新旧論争における近代派が推進したこともあり、基本的に男性的領分だった古典古代の学識（érudition）とは明確に区別された³²。グロ・ド・ボーズが念頭に置いていたのも、まさにこのジャンルとジェンダーの棲み分けである。

猫が、鼠から本を守る男性学者の有用な友という中世以来の表象を離れ、社交界の貴婦人のペットとして認識され始めていたことは、同時代の時評にも見て取れる。顕著な例として、18世紀初頭のベストセラーである、ヴィニユール＝マルヴィル『史文雑録』（初版1699年）がある。著者は無用の動物に対する「異様な愛情」が「実に多くの人々」の間に見られると指摘し、動物は実用に資する限りで飼うべきであると述べる。「猫は手に負えない獣だが、クッションに

座って懦弱にも餌をもらい、本来の身分を忘れて鼠狩りを怠るなら、全く何の用があるのか。」この「実に愚かな愛情」を「友情に関しても何事につけても、奇怪な発想をする女性」が抱くのならわかるが、「賢人」（つまり男性）にとっては恥ずべきだという。別所でも猫好きとして槍玉にあがるのは女性である。夫が死んでも涙を取り繕うだけだったある女が、猫が死んだら涙に暮れたという逸話を挙げて、著者は「幸せな猫！ 哀れな夫！ 狂った妻！」と風刺する³³。17世紀末より顕在化した、役畜としての役割を度外視して猫などの動物を愛玩する態度は、女性的な趣味として、あるいは女性にのみ許容される愚かしさとして認識されるようになっていた。モンクリフの協力者ケリュスも同様の認識をもっていたようで、犬を念頭に置いてのことであるが、愛玩動物に過度な執着を見せ、いつも話題にして片時も肌身離さないような態度を、手記のなかで痛烈に批判し、とくに「男」が「斯様な軟弱さを公にさらけ出す」など言語道断である、と断じている³⁴。

その筆致から察するに、モンクリフは猫好きの女性たちに共感し、同時代人の猫嫌いとは距離を感じていたと思われる。しかし男性であるモンクリフが、暴力と笑いに満ちた滑稽文学の伝統にも依らず、詩集の一部を割いて自分の愛猫に詩を捧げるという形式も取らずに、一冊の書物を著すほどの大きな関心を猫に対して示せば、ジェンダー規範から逸脱することになる。したがって彼は、猫について個人的に感ずるところは一切述べて、ただ猫好きの貴婦人の要請に応える奉仕という形式で自らの著作を提示する必要があった。こうすることで彼は、男性が死んだ動物を弔う詩を飼い主である女性に献上する、という古代以来の伝統的なジェンダーの構図に倣ったのである。

逆に考えることもできる。グロ・ド・ボーズが指摘したように、貴婦人宛て書簡の体裁を取るのであれば、典雅文学の枠内に留まって文芸談義をするのが常道だったはずである。モンクリフが敢えて社交界でもてはやされた動物詩という枠組みを越えて、男性だけの領分である習俗論に手を出し、周囲の学者の協力を得ながら研究を行ったのは、彼自身の意欲の産物であろう。したがって『猫』における学識と遊戯の混淆は、女性向けの体裁を取ることでジェンダー的逸脱を回避する戦略としてだけでなく、習俗論の潮流に乗って比較文化論的見地を提供することで、フランス人の猫嫌いを批判しようと狙ったモンクリフの真剣さの印としても読むことができる。

4. 権威の借用

モンクリフは猫愛好を擁護するにあたって、哲学者を引用し、習俗論を述べるだけでなく、フランス上流社会の権威の借用も行った。つまり、文芸における猫を扱った後半部分で、社会

的地位の高い人物を先例として引用する戦略も用いたのである。

猫を愛した人として挙げられる多くは女性である。煩雑になるため注で列挙するにとどめるが、7名の女性が実名で挙げられている³⁵。大半は侯爵夫人以上の高位貴族で、例外は小貴族だった詩人デズリエールと、平民のデュピュイである。後者は裕福な未亡人で、1677年に死去した際、遺産の一部を飼い猫の飼育費用として指定した遺言書が裁判沙汰となり、『メルキュール・ギャラン』で報道されるなど話題を呼んだ人物である³⁶。デュピュイは公の場でハープ奏者として活動して回ったなど型破りな人物として知られていたようで、裁判の際には、おそらく彼女が狂人であることを示そうとした遺族によって、遺言の一部が出版されている³⁷。しかしモンクリフは狂人呼ばわりされたことを黙殺し、あくまでも猫と女性音楽家の結びつきを示す例として紹介した。これらの例を通して注目すべきことは、いずれもパリの社交界で話題になった人物だということである。モンクリフ自身、猫愛好が「パリで」ますます勢いを得ている、と明記している（145頁脚注）。

猫好きの男性も数名の名前が挙がっている。割かれる紙幅が少ないために女性愛好家よりも印象に残りにくいが、数の上では5名とあまり引けを取らない。いずれも文人あるいは政治家として名声を得ていた人物である。このうち2名は既に言及した詩人のデュ・ベレとメナールで、墓碑銘とともに引用されている（134, 164頁）。残り3名は一か所で合わせて紹介される（102-103頁）。まず猫と戯れて遊んだと『エッセー』に記したモンテーニュ。彼も印刷物上で自ら猫との関わりに言及した男性作家である。つづいて、多忙な政務の合間に「フランスが誇る名宰相のひとり」が猫と遊んで気晴らしをした、と記されているが、注釈によればコルベールのことらしい。一般に同様の逸話をもって伝えられるのはリシュリユーであるが、口頭伝承される過程で指示対象がずれたのかもしれない³⁸。残るフォントネルの逸話は直接本人から聞いたものと思われる。幼少期に「偏見」を打ち破って猫を「愛でる」ようになったことは上記の通りだが、幼きフォントネルはそれ以来、猫相手に演説の真似事をしては、飽きて逃げ出す猫を追いかけてまわして遊んだらしい（102-103頁）。

以上の猫愛好家列伝を通して、モンクリフは三つのことを行っている。第一に、挙げられる人物の半数ほどは、自ら猫との関係性を出版物のなかで語ることなく、したがってモンクリフ以前には印刷物上で猫好きとして知られていなかった者である。すなわちモンクリフは、パリの社交界のゴシップとして流通していた口頭の情報を、文字情報に変換して喧伝したのである。この際モンクリフによって初めて猫好きとして紹介された女性は、いずれも侯爵夫人以上の高い爵位を有する高位貴族である。これは、猫愛好を愛好家の身分の高さによって正当化する戦略であるとともに、猫好きを嘲弄する風刺的言辞に対する牽制としても読める。

第二に、女性愛好家の紹介よりも簡潔ではあるものの、男性の例が含まれているところには、猫愛玩を女性の趣味と見なすジェンダー規範に対するささやかな抵抗が読み取れる。実際モンクリフは、「猫と交際する楽しみがパリでは日に日に認められつつある」と語るさい、猫と「甘美な生活を送っている人々 (ceux) のリストを作れば長大になるだろう」と書いている (145 頁脚注)。つまり ceux という男性複数形の語形によって、暗黙に男性愛好家の存在も言い含めているのである。

第三にモンクリフは、それまで散発的に点在していた猫にまつわる文芸作品と逸話を集め、ひとつのまとまった言説として提示した。これは猫愛好家が帰属すべき文化的潮流の存在を知らしめることにほかならない。こうすることで『猫』は、猫愛玩という行為を孤立した例外的行為から、共通の参照点をもつ社会現象に変質させる、触媒としての役割を果たしたかもしれない。この点は受容研究による論証が必要であるから、いまは仮説として述べるに留めておく。

5. 対等なる友

猫愛好を擁護するための最後のひと押しとして、モンクリフは猫という動物そのもののイメージの塗り替えも図った。中世以来、猫が重宝されたのは主に鼠を狩る役畜としてであって、この仕事をしない「穀潰し」は殺されて然るべきである、という意見は寓話にも農学書にも見られる³⁹。これに対してモンクリフは、所々で鼠に言及するものの、猫の美点を列挙する際には役畜としての役割を度外視している。すなわち猫は「とても楽しい友 (un ami de très bonne compagnie)、素晴らしい曲芸師、生来の星占術師、完璧な音楽家、そして才能と洗練の結晶」 (155 頁) であるという。要するにモンクリフのいう猫は、社交生活を彩る才人よろしく、娯楽的な観点から重宝されるペットである。

モンクリフは、広く流布した狡猾な偽善者としての猫イメージに対しても、権威ある寓話作家ラ・フォンテーヌを都合よく引用することで対応している。つまり彼は、猫と無縁の詩の引用を巧みに織り交ぜることで、猫の悪辣さを強調したラ・フォンテーヌの趣旨をさりげなく捻じ曲げた。ミネルヴァの美を称える詩を猫の目の美しさに適用し、プシュケの恋人に対する愛情を詠う詩行を猫同士の愛情にあてはめ、猫に対する恐れを幼稚な「偏見」と呼ぶ段では、「恐怖は子供の最初の教訓」という金言を引く (128, 79, 6 頁)。猫が登場するラ・フォンテーヌの寓話は、悪しざまに「馬鹿馬鹿しい異名を猫に与えるかのふりをしている」に過ぎず、狡知や俊敏さを称えるのが主眼である、と強引に解釈する (110 頁)。

モンクリフはむしろ、主に図像学に見られた、猫を自由の象徴と見なす伝統に身を寄せた。

猫は家屋の屋根を闊歩し、どこに住むのも「かれらの野心や哲学しだい」。そして「都市の上層に住み、そこで自ずから維持され繁栄する、ある種の国 (République) を構えています」(142-143 頁)。地面を這いつくばって人間に従う犬などの家畜とは違い、「高所」に住まう猫は自力で生存に必要な食糧を確保することができ、人間に隷属する必要はない。

続いてモンクリフは、この自由な猫が、「かくも幸福な独立生活を離れて」敢えて「我々の住まいに降りてくる」ことは、大きな自己犠牲なのだと強調する。猫が「我々との交際 (commerce) を望むのは、ひとえに礼節の心 (courtoisie) からではありませんか」とモンクリフは問う。「犬は最も完璧なものでも、忠実な奴隷にすぎません。対して猫は楽しい友 (un ami amusant) であり、その愛着 (attachement) は自由意志に基づいて (volontaire) います。あなたに捧げる瞬間ごとに猫は、住まいも好き嫌いも思うがままという自由と柔軟さを諦めているのです」(144-145 頁)。時に飼い主に対しても爪をむいて引っかくことを以て、ひとは猫の不実をなじってきたが、モンクリフはこの点にもむしろ「友情の慎み」(la délicatesse de l'amitié) を見出す。すなわち身体構造上、本来は爪を出しているのが自然であるところを、「絶え間ない抑制」と「細心の注意」によって爪を隠し、人を傷つけないように配慮しているのだから、「猫には愛情があり、人に対する配慮もできる」のだという (152-154 頁)。

「交際」、「友情」など、猫に対して適用されている語彙は本来、自由意志を有し、礼節により振舞を抑制した人間に固有の社交性 (sociabilité) を語る際に用いられる語彙であり、モンクリフ自身の社交論のキーワードでもある⁴⁰。モンクリフは自由と礼節を強調することで、猫を人間と同格の友 (ami) の地位に引き上げているのである。猫は礼儀作法を身にまとして、野獣性を離れて人間的文明に与るかのように立ち現れる。

ここで対比のために犬が引き合いに出されていることに留意したい。犬と猫を対比的に捉える見方は今日ではありふれているが、猫を鼠との関係において想起するのが主であった近世において、この発想は必ずしも自明ではなかった⁴¹。「犬猿の仲」に対応するフランス語の諺に「犬猫の仲」という言い回しがあり、犬と猫の喧嘩は寓話にも頻繁に見られるものの、これはあくまでも家庭の近くで観察される動物同士の不和の象徴であるにすぎず、犬と猫が性格のうえで対比されているわけではない。そのしるしに、イソップとラ・フォンテーヌにおいて犬と猫の組み合わせが登場する唯一の寓話では、鼠も同列に喧嘩に参加している。

寓話において犬と猫の性格的対比が見られるようになるのは、ちょうどモンクリフの『猫』が出版される前後の時期のことである。モンクリフと近しかった詩人ウダール・ド・ラ・モットの「犬と猫」(1719 年) がその嚆矢で、猫がカナリアを殺し、その罪をなすりつけて飼い主の懲罰を誘導することで、犬を謀殺する様子を描く⁴²。犬と猫をペットとして人間との関係のも

とに置き、犬に素朴さ、猫に狡猾さをあてがう表象である。リシェの寓話「ラット、鼠、猫、犬」(1729年)では、チーズの番を任された猫がチーズを自ら食べてしまい、犬に叱られる。忠犬と不忠の猫の対比である⁴³。このように1720年代ごろには、犬と猫を道徳的な指標により比較する思考が、寓話においても現れ始めていた。モンクリフはこの新たな対比的言説を取りつつ、しかし猫の自立を不忠ではなく自由として、犬の忠節をむしろ隷属として読み替えることで、犬ばかりを称揚する通説に反対したのである。

このモンクリフの主張は、猫愛好を正当化する以上の意味をもちえた。動物を人間よりも下位の取るに足らない存在として見なせば、これに過度な関心を抱くことは、ヴィニユール＝マルヴィルが断じたように、「愚かな」振舞と映りかねない。犬が相手ならば狩猟や護身という名目があり、また躰によって支配する関係性を保ちやすい。猫は犬ほどに意のままに従わず、しばしば人間の支配の限界をさらけ出す。家畜に対する支配ではなく、対等な者同士の友情という枠組みで猫との関係性を捉えるモンクリフの考え方は、人間の側に、支配なき「交際」を期待させるものである。これは昨今の動物批評における、猫をモデルとして人間による動物の支配を再考する議論と、少なからず響きあう主張である⁴⁴。『猫』という書は、軽妙なパロディという「おふざけ」の体裁を取りこそすれ、猫との対等な関係性を受けいれて楽しむという発想を説く点で、一つの斬新な哲学を示していた。

おわりに

モンクリフの著作『猫』は、猫愛好を女性化するジェンダー規範を意識しながら、猫への恐怖心を幼稚な偏見として笑い、時間と空間を広げてヨーロッパ人の猫に対する偏見を相対化する視野を提供し、猫を好んだ貴顕の人々の先例を両性にわたって挙げ、そして猫を人間と対等の友として描いた。18世紀初頭には依然として異端的な存在であった愛猫家は、この書から、猫を愛でるという自らの行為を正当化するための材料を得られたはずである。

人と猫の関係史のなかでモンクリフの著作が果たした役割を知るためには、本稿で行ったテキストそれ自体の分析に加えて、同時代人による受容の研究が欠かせない。受容研究は本稿の範囲を越えるため、ここでは簡単な仮説的見通ししか述べられないが、本書の影響力は少なかつたはずである。猫を長々と論じたこの著作は、敵に攻撃の口実を与えることになり、モンクリフは作品集から同書を排除することを迫られた。しかし海賊版の出版が続き、著者の死後、作品集に『猫』が収録されたことから見るに、18世紀を通じて読者側の需要はたしかに存在したと思われる。彼の主張の反響は、19世紀初頭に現れた猫飼育マニュアルなど所々に見出せるが、詳しくは機会を改めて論じたい。

モンクリフはヨーロッパ人の猫嫌いを、猫の性質の問題ではなく、人間側の「偏見」の問題とした。リルティによれば、社会と習俗が歴史を通じて変化するという時間意識のもと、異国の習俗との比較を行いながら、自らの属する社会を考えることこそ、18世紀啓蒙の特色であるという⁴⁵。この啓蒙観にしたがうならば、地中海沿岸の「猫好き」社会を参照点としつつ、社交界で顕在化した新たな猫愛玩の文化を範として掲げ、猫に対する態度を考え直すよう同胞に促したモンクリフの論法は、すぐれて啓蒙的といえる。ダーントンのいう「猫の大虐殺」がまかり通った18世紀前半のパリで、猫の啓蒙とでも呼ぶべき思考が芽生えていたのである。

¹ この見通しを示す主要なものとして以下がある。Robert Delort, *Les Animaux ont une histoire*, Paris, Seuil, 1984, p. 346–350 (ロベール・ドロール『動物の歴史』桃木暁子訳、みすず書房、1998年); Laurence Bobis, *Une histoire du chat : de l'Antiquité à nos jours*, Paris, Seuil, 2006。さらに詳細な研究状況については次を参照。貝原伴寛『『猫の大虐殺』を読みなおす 十八世紀フランスにおける人と猫の関係史』『思想』2020年9月号、92–115頁。

² 近年、米国、フランス、日本を含む多くの国で、猫の飼育数は犬の飼育数を上回るに至っている。現代における猫の飼育については次を参照。Éric Baratay, *Et l'homme créa l'animal : histoire d'une condition*, Paris, Odile Jacob, 2003, p. 343–351。

³ François-Augustin Paradis de Moncrif, *Les Chats*, Paris, Quillau, 1727。以下同書から引用する際には本文中に頁数を丸括弧で記す。

⁴ Champfleury, *Les Chats : histoire, mœurs, observations, anecdotes*, Paris, J. Rothschild, 1869, p. 105–109; Robert de Laroche, « Moncrif ou l'irrésistible ascension du chat botté », préface à Moncrif, *Histoire des chats*, Puisseaux, Pardès, 1988, p. 9–28。

⁵ Jean-Claude Lebensztejn, *Miaulique : fantaisie chromatique*, Paris, Le Passage, 2002 (ジャン＝クロード・レーベンシュテイン『猫の音楽 半音階的幻想曲』森元庸介訳、勁草書房、2014年); Jacques Berchtold, « Le miaulement du chat égyptien. Moncrif, Rousseau et la leçon du relativisme culturel », *Orages*, n° 6, 2007, p. 81–92。

⁶ Laurence Bobis, *Les neuf vies du chat*, Paris, Gallimard, 1991, p. 103–105; *Id.*, *Une histoire du chat*, op. cit., p. 259–260; Katherine M. Rogers, *The Cat and the Human Imagination: Feline Images from Bast to Garfield*, Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1998, p. 86–87; *Id.*, *Cat*, London, Reaktion Books, 2006, p. 166–167。(キャサリン・M・ロジャース『猫の世界史』渡辺智訳、エクスナレッジ、2018年)

⁷ Robert Darnton, *The Literary Underground of the Old Regime*, Cambridge (Mass.), Harvard University Press, 1982, p. 1–40。(ロバート・ダーントン『革命前夜の地下出版』関根素子・二宮宏之訳、岩波書店、1994年) モンクリフの生涯については次が詳しい。Edward P. Shaw, *François-Augustin Paradis de Moncrif (1687–1770)*, New York, Bookman Associates, 1958。

⁸ モンクリフの社交論については次を参照。増田都希「ホモ・エコノミクスの礼節論 モンクリフ『氣にいられることの必要性和その方法』(1738)に見る作法と徳、そして欲望』『史潮』第72号、2012年、87–106頁。

⁹ François-Augustin Paradis de Moncrif, *Œuvres de M. de Moncrif*, Paris, Brunet, 1751, tome 1, p. iv。

- ¹⁰ 以下本段落で用いた史料については貝原前掲論文、99 頁を参照。
- ¹¹ L. Bobis, *Une histoire du chat*, op. cit., p. 187–239.
- ¹² 貝原前掲論文、97–102 頁。
- ¹³ 聖ヨハネ祭で猫を焼く慣行はパリにも存在したが、17 世紀のうちに廃止されたようである。Germain-François Poullain de Saint-Foix, *Essais historiques sur Paris*, 4^{ème} édition, Paris, la Veuve Duchesne, 1766, tome 5, p. 31–32.
- ¹⁴ 動物虐待批判言説については次を参照。Pierre Serna, *L'animal en République : 1789–1802, genèse du droit des bêtes*, Toulouse, Anacharsis, 2016.
- ¹⁵ Jochen Schlobach, « Progrès » dans Michel Delon (ed.), *Dictionnaire européen des Lumières*, Paris, PUF, 1997, p. 1041–1045.
- ¹⁶ 注 5 を参照。
- ¹⁷ 本段落の内容は以下に基づく。Nicolas Dew, *Orientalism in Louis XIV's France*, Oxford, Oxford University Press, 2009 ; Lynn Hunt, Margaret C. Jacob and Mijnhardt Wijnand, *The Book That Changed Europe: Picart & Bernard's Religious Ceremonies of the World*, Cambridge (Mass.), Harvard University Press, 2010.
- ¹⁸ ケリュスについては以下を参照。Joachim Rees, *Die Kultur des Amateurs: Studien zu Leben und Werk von Anne Claude Philippe de Thubières, Comte de Caylus, 1692–1765*, Weimar, Verlag und Datenbank für Geisteswissenschaft, 2006.
- ¹⁹ « Lettre de Gros de Boze à l'abbé Bignon sur le livre intitulé *Les Chats* » (L'Ile-Belle, 3 juin 1727), Bibliothèque nationale de France, cote 2011/091/ACM02-06.
- ²⁰ *Journal des sçavans*, août 1727, p. 492–497.
- ²¹ 注 19 を参照。
- ²² Conrad Gessner, *Historiæ Animalium Lib. I. de Quadrupedibus viviparis*, Zurich, C. Froschauer, 1551, p. 344–353 ; Ulisse Aldrovandi, *De Quadrupedibus Digitatis Viviparis Libri Tres...*, Bologna, M. A. Bernia, 1637, p. 564–585.
- ²³ 詳細な犬論の一例として次がある。Christian Franz Paullini, *Cynographia curiosa seu Canis descriptio*, Nuremberg, J. G. Endter, 1685.
- ²⁴ Noël-Antoine Pluche, *Spectacle de la nature*, Paris, la Veuve Estienne, 1732, tome 1, p. 346.
- ²⁵ Robert Darnton, *The Great Cat Massacre and Other Episodes in French Cultural History*, New York, Basic Books, 1984, p. 75–104. (ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』海保真夫・鷺見洋一訳、岩波書店、1986 年)
- ²⁶ 本段落の内容は次に基づく。Jan Papy, « Lipsius and His Dogs: Humanist Tradition, Iconography and Rubens's *Four Philosophers* », *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 62, 1999, p. 167–198 ; Kathleen Walker-Meikle, *Medieval Pets*, Woodbridge, Boydell Press, 2012, p. 96–107.
- ²⁷ ただし猫への関心の高まりの証というべきか、デュ・ベレの詩は 18 世紀初頭にラテン語訳されて二言語版が単体で出ている。Joachim du Bellay, *Vers françois et latins sur la mort d'un petit chat*, traduction en latin par Noël-Étienne Sanadon, s.l., s.n., [1713].
- ²⁸ Alain Viala, *La France galante : essai historique sur une catégorie culturelle, de ses origines jusqu'à la Révolution*, Paris, PUF, 2008.
- ²⁹ Patrick Dandrey, *La fabrique des Fables : essai sur la poétique de La Fontaine*, Paris, PUF, 1996, p. 19–34.
- ³⁰ デズリエール作品については貝原前掲論文、106–107 頁を参照。
- ³¹ レニエがレディギエール公爵夫人の猫メニースに捧げた詩と、モンクリフがメヌ公爵夫人の猫マルラマンに捧げた詩。マルラマンにはウダール・ド・ラ・モットも墓碑銘を詠んだという。
- ³² A. Viala, *La France galante*, op. cit.
- ³³ Vigneul-Marville, *Mélanges d'histoire et de littérature*, Paris, C. Prudhomme, 1701, tome 3, p. 13–15, 343–344.
- ³⁴ Anne Claude Philippe de Caylus, *Mémoires et réflexions du comte de Caylus*, Paris, P. Rouquette, 1874, p. 30–32.

- ³⁵ 頁数を合わせて記す。Madame Deshoulières (95), la duchesse de Lesdiguières (104), la duchesse du Maine (96), la marquise de Montataire (99), Madame de la Sablière (121), Jeanne Dupuy (238), la princesse de Bouillon (145).
- ³⁶ Michèle Prouté, « Le chat de Mademoiselle Dupuy », *Gazette des beaux-arts*, septembre 1979, p. 95–96.
- ³⁷ フランス国立図書館所蔵 (請求番号 FOL-FM-5473)。
- ³⁸ 猫好きリシュリューという逸話自体、出処がはっきりしない。18 世紀末の次の史料などに見られるが、それまでは社交界で口頭伝承されたのだろうと推測される。Jean-Marie-Louis Coupé, *Les Soirées littéraires*, Paris, Honnert, 1796, tome 3, p. 236.
- ³⁹ Antoine Furetière, *Fables morales et nouvelles*, Paris, L. Billaine, 1671, p. 43–47 ; Alexandre-Henri Tessier et André Thouin, *Encyclopédie méthodique. Agriculture*, tome 3, Paris, Panckoucke, 1793, p. 78–79.
- ⁴⁰ 増田前掲論文ならびに Maurice Daumas, *Des Trésors d'amitié : de la Renaissance aux Lumières*, Paris, Armand Colin, 2011. なお動物に友情能力を認めるのはモンテーニュの立場であるが、モンクリフとモンテーニュの関係は別の機会に論じたい。
- ⁴¹ L. Bobis, *Une histoire du chat*, *op. cit.*, p. 139–143.
- ⁴² Antoine Houdar de La Motte, *Fables nouvelles, dédiées au Roy*, Paris, G. Dupuis, 1719, p. 301–304.
- ⁴³ Henri Richer, *Fables nouvelles mises en vers*, Paris, Ganeau, 1729, p. 27–28.
- ⁴⁴ Erica Fudge, *Pets*, Stocksfield, Acumen, 2008 ; Florence Burgat, *Vivre avec un inconnu : miettes philosophiques sur les chats*, Paris, Payot & Rivages, 2016. (フロランス・ビュルガ『猫たち』西山雄二・松葉類訳、法政大学出版局、2019 年)
- ⁴⁵ Antoine Lilti, *L'Héritage des Lumières : ambivalences de la modernité*, Paris, EHESS-Seuil-Gallimard, 2019.

Un féliniste des Lumières : défense et illustration de l'amour des chats chez Moncrif

KAIBARA Tomohiro

Le chat est aujourd'hui un animal de compagnie majeur, mais en Europe, ce statut ne date que du XVIII^e siècle, époque à laquelle on commença à réhabiliter cet animal longtemps déconsidéré. Pour servir à élucider ce processus, nous proposons ici une analyse du livre de Paradis de Moncrif, *Les Chats* (1727), un texte connu mais peu étudié comme source historique du rapport entre les humains et les chats.

Nous montrons que ce premier livre sur le chat repose sur quatre stratégies discursives. L'auteur souscrit d'abord aux nouvelles philosophies de Locke et Malebranche pour critiquer la haine des chats, répandue parmi ses compatriotes, en la caractérisant comme un effet de l'imagination dérégulée.

Deuxièmement, Moncrif contribue à l'étude comparative des religions, féconde à l'époque, et discute l'amour des chats chez les anciens Égyptiens et les musulmans. Ceci sert non seulement à relativiser l'attitude hostile des Européens envers ces animaux, mais aussi à donner au livre un caractère savant, ce qui légitime l'intérêt envers le chat qu'on considérerait normalement comme féminin.

En troisième lieu, Moncrif cite plusieurs amies et amis des chats connus dans le beau monde pour avancer que l'engouement pour ces félins est une affaire légitime, pratiquée par d'illustres personnages des deux sexes. C'est un geste public important, car Moncrif transmet aux lecteurs ce qui n'était qu'une connaissance orale des mondains de Paris.

Enfin, recourant au langage de la civilité, Moncrif représente le chat comme un animal libre, indépendant et à la fois poli, capable d'entretenir une amitié avec l'humain en termes égaux.

En bref, le discours « féliniste » de Moncrif ne dérive pas simplement de la mode des chats comme on l'a dit. Si l'auteur a pu remettre en cause le « préjugé » de ceux qui détestaient les chats, c'est parce qu'il s'appuyait sur la philosophie critique et sur l'étude d'autres cultures, qui nourrissaient un regard réflexif sur la société humaine, attitude caractéristique des Lumières.